

チョウセンマメハンミョウの亜種変異と食餌植物

境 良朗

チョウセンマメハンミョウ *Epicauta chinensis taishoensis* Lewis, 1879 は日本では対馬だけに分布する大陸系の昆虫である (写真1)。

亜種変異

対馬産については、「大陸産の基亜種に比べて上翅側縁の灰白条を欠くことで異なり、亜種 *ssp. taishoensis* に属する」(黒澤良彦, 1985) とある。そこで Web サイトに上がっている朝鮮半島産の個体を見てみると、指摘のとおり上翅の縁に沿って白く細い帯が明瞭に走っていることが確認できた。一方で対馬産の上翅はほぼ一様に光沢のない黒色で、側縁と上翅末端後縁に極わずかにうっすらと暗灰白色が出る個体が見られることはあるものの、朝鮮半島産とは明らかに区別できる。ところが、韓国のいくつかのサイトで基亜種の学名を採用せず、あえて対馬亜種 *ssp. taishoensis* のクレジットを付しているのはなぜなのだろうか。現在の対馬産と朝鮮半島産との亜種関係はどうなっているのだろうか。なお雌雄の区別は、♂の触角が第5〜7節が太くなることで区別は容易である (写真1・2)。

既産地と発生期

対馬では4月下旬(初見:24日)から6月下旬(終見:27日)頃にかけて発生するが、産地は局地的であり、これまで筆者が確認できたのはわずか4か所である(図1)。発生地では数年にわたり継続して見られる傾向があり、個体数も少なくない。



図1 発生地



写真1 (左♂右♀)



写真2 交尾

食餌植物

対馬での本種の生態については幼生期などを含め何も分かっていないのが現状であるが、成虫の食餌植物を4種確認しているので、主なデータとともに報告する。

1) ボタンヅル *Clematis apiifolia* (キンボウゲ科)

既産地の全てにおいてボタンヅルで成虫が見つかっていて、最も好まれているという印象を受ける。発生地では多数が集まり、葉を嚙っている様子や交尾個体を観察することができた(写真2・3)。本属の幼虫はバッタ類の卵塊を食べて成長し、同属のマメハンミョウ *Epicauta* (*Epicauta*) *gorhami* の成虫は広範な植物を食べることが知られているが、本種は思いのほか狭食性なのかもしれない。

・数頭, 19. V. 2015, 対馬市豊玉町仁位。

・1♀, 27. VI. 2009, 対馬市厳原町久田。杉憲撮影 [終見記録]

- ・数頭, 8. VI. 2016, 対馬市上県町目保呂.
- ・1 ♀, 10. VI. 2011, 対馬市美津島町焼松. 西弥生撮影

2) イヌタデ *Persicaria longiseta* (タデ科)

恐らくタデ科のイヌタデであろうとご教示いただいた(小宮氏, 私信). 発見時は10頭ほどが集まって盛んに葉を嚙っていたが, 撮影を始めると気配を察知して徐々に分散していった.

- ・数頭, 22. V. 2014, 対馬市豊玉町仁位. (写真4)

3) クズ *Pueraria lobata* (マメ科)

- ・1 ♂, 24. IV. 2021, 対馬市厳原町久田. [初見記録]
- ・5 ♂, 29. IV. 2021, 対馬市厳原町久田. (写真5)

4) ネムノキ *Albizia julibrissin* (マメ科)

同所にはクズもあったがネムノキに多く集まっていたことから, ネムノキの方がより好まれる傾向にあるのかもしれない.

- ・多数, 8. V. 2021, 対馬市厳原町久田. (写真6)



写真3 ボタンヅル



写真4 イヌタデ



写真5 クズ



写真6 ネムノキ

また, 2010年6月7日豊玉町仁位において, 本種が飛翔する姿を動画撮影している. この体形にもかかわらず想像以上の飛翔力があるのに驚かされた. (YouTubeで検索「チョウセンマメハンミョウ」)

末筆ではあるが, 食餌植物の種名や分布状況についてご教示いただいた小宮秀光氏, 杉憲氏, 西弥生氏にお礼申し上げます.

引用文献

黒澤良彦, 1985. チョウセンマメハンミョウ. 原色日本甲虫図鑑(Ⅲ): 412. 保育社, 大阪.